天理参考館から（5）

春の訪れを告げるもの

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

近年は、隣国の中国、韓国からの訪日客が増える時期として、「春節」という言葉が定着した観がある。「春節」は旧暦の正月で、今年は２月８日にあたる。相前後して、同様に旧暦の正月の節である二十四節季の立春も、毎年２月４日頃に迎える。まさにSpring has come!　春の到来である。立春を待ちかねて、雛人形を飾る家庭も多いのではないだろうか。東京の浅草橋や大阪の松屋町といった人形問屋街だけでなく、デパートでもバレンタイン商戦と同時に、３月の桃の節句に向けて雛人形の販売に力を入れる時期になる。

雛人形の起源は「ひとがた」と言われている。「ひとがた」とは木片や紙を人のかたちに切ったもので、これで身体を撫でたり息を吹きかけたりして、災厄やけがれを移して祓い、水辺に流す。今日各地に伝わる流し雛の行事を思い浮かべていただくとよい。嫌なことを“水に流して”おしまいにする、なかったことにするという、ある意味都合のよい日本人的な考えは、こんなところに起因するのかもしれない。

古代の祓いの道具であった「ひとがた」は、時代が下るにつれて流さずに手元に置いて飾り、娘の成長を祝う雛人形へと発展していくことになる。雛人形はずっと昔、平安時代ぐらいから存在したと考える方もいるだろうが、いわゆる今日「人形」と称されるものは、人々の経済力が安定する江戸時代の文化文政頃に発達する。平安時代には「ひひなあそび」と称する、『源氏物語』で少女時代の紫の上が興じるままごとがあったぐらいである。

立雛に始まり、泰平な世が続いた江戸時代には幾通りもの雛人形が生みだされるが、そのなかの一つのスタイルが、今回ご紹介する次郎左衛門雛である。京の雛屋次郎左衛門が考案したと伝えられ、この名がついた。まん丸の顔にきょとんとした引目鉤鼻（ひきめかぎばな）の表情の愛らしさが当時の人々の心を捉えたのである。次郎左衛門は後に幕府御用達となり、江戸日本橋に移るが、江戸でも宝暦年間（1751 ～ 1764）、大いに流行した。旧大名家に比較的多く伝わり、３月から４月にかけて全国各地の美術館、博物館で公開されて目にすることができる。伝統的と思われがちな雛人形も、江戸中期から150年程の間に実に８通りぐらいのモデルチェンジがおこなわれた。いつの世も“美人”、“可愛い”の定義は移り変わるものである。宝暦好みのこの丸顔は果たして平成の皆様のお気に召すだろうか？

最後に飾り方について、よく質問を受ける内容をご紹介しておきたい。男雛と女雛、一体どちらを右に飾るかということである。京都を中心とする関西では、男雛を向かって右に飾ることが多く見られる。これは御所の紫宸殿が南に面しており、天皇は南に向かって日出る東に座することに由来する。段飾りにある左近の桜、右近の橘は、あくまでも玉座から見て左近・右近なので、我々から見ると向かって右が桜、左が橘となる。関東では昭和天皇の即位式の立ち姿から影響を受けて、男雛を向かって左に飾る。これは言わば西洋式で、騎士（ナイト）は右手で剣を振るいつつ、左手で女性を護る、という考えに基づく。一方、関東で人気の五人囃子の並び方は決まりがあり、揺るぎない。決め手は何か？　持ち物、楽器である。五人囃子は能楽を奏でる五人衆であり、演奏担当の囃子方４人に、声楽担当の謡１人から構成される。向かって左から、「太鼓（たいこ）」「大鼓（おおかわ）」「小鼓（こつづみ）」「笛（ふえ）」「謡（うたい）」の順に並べられる。何を基準としているのかおわかりだろうか。そう、右から音の小さい順に並んでいるのである。天皇の近くで大きな音をたてるはずもなく、やはり関西風の男雛女雛の飾り方に分があると思うのは関西人たるゆえんだろうか。これも大人の教養の見せ所。今年は子どもと一緒に雛人形を飾って「雛人形の飾り方というものは……」と蘊蓄を傾けてはいかがだろうか。

次郎左衛門雛 全高 9.0cm